

委ねきつた時にこそ

佐々木公子

十年前の貴重な体験である。…二日後の手術を控え、術前の処置などに追われながらの時間が流れていた。三年連続の手術ともなれば、手術前の病院のおおよその流れも予測がつく。術後の動けない日々のために身の整理をし、もしもの時のために遺言状も書いた。好きな聖句と賛美歌を選び、心にかかる人への電話も済ませた。神にすべてを委ね、緊張の中にも気持ちは平安であった。

病院の消灯時間は早い。その夜静かになった床の中で、私はいつものように祈り始めた。娘達のこと、夫のこと、年老いた母のこと等々：「神様お願いします。お守りください」という渾身の祈りであった。が、祈りの途中（すべてを委ね切りなさい）の声を聞いた。同時に、ふいに心がスーッと空になり、温かいものが全身を覆ったかと思うと、なんとも言えない平安が訪れた。（人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安）であると言いついた。もはやなんの不安もなかった。

翌朝目覚めると、心が晴れ晴れとしていて、何もかもが美しく見え、空の青さが目にし

みた。病院の庭に出て、暫くは味わえない、否、最後になるかも知れない土の感触をゆつくりと味わった。土がこんなに柔らかく温かいことを、今まで知らなかったような気がした。その一日、私は周りのすべてに感謝の思いがあふれ、心が優しくなっていることに気付いた。神に委ねていると言いながら「お願いします」と必死に祈っていた間は、本当に委ね切っていなかったのだと思った。試練の中にあつて初めて神の深い愛と真実の平安が分かるのかも知れない。その夜の私の祈りは、ただただ感謝の祈りであつた。

手術当日の朝、家族や友人たちに見送られ、がんに冒された腎臓を摘出するべく手術室へ向かった。心底平安であつた。